

『どついたれ』と呼ばれた男(2)

文 葛西得男

Text by Tokuo Kasai

「保育」の原点

父

は手塚作品の中で『鉄腕アトム』が好きでよく鉄腕アトムの絵を見ていました。父は本当に手塚先生を尊敬していましたし、手塚先生も父を尊敬されておられ、生前テレビ番組でも最も尊敬し、数少ない本当の「ふれあい」をした方であると父のことを紹介して頂いていました。

NHKの番組だったと思いますが、大阪の父の行きつけのお店で手塚先生とご一緒に取材をされた事があります。放送された中に、手塚先生が苦難されていた当時の事などを紹介している場面がありました。

そして、利益が出たらどうするのか？という話になったのです。先生は「使えう」。父は「そら、先に返さなあきまへんわ」。「いや、使えう」「そら、あきまへんわ」と食い違う場面があったのですが、お互い歯に衣着せぬ話をされているのを見た時、お互いの尊敬と信頼を強く感じたものでした。

そして、最後に父は「手塚先生は大した人です。ほんまに凄い人ですわ」とポツリと言っている場面がありました。本当に信頼し合っ

ている二人なのだなと感心したので覚えておきます。

父は悦子夫人にも尊敬され、信頼され、生涯を通じて家族や松谷社長、手塚プロダクションのスタッフなどとも交流していました。

先日、手塚治虫先生も共感、感動されたという父のコンセプトでもある「赤ちゃんを祈る」という言葉の意味を記しましたが、その象徴になる絵を特別に手塚プロダクションに描いて貰ったことがあります。

父は体調の不調により様々なケアを考えて松稲会アップリケアの一角に入所することになりました。そして、その「赤ちゃんを祈るアトム」の話を友人のイラストレーターである黒田征太郎氏が聞いて、毎週一枚「赤ちゃんを祈るアトム」のイラストを父の病室に送ってくれました。

そのイラストは色鉛筆で描かれた簡単なものではありましたが、本当に黒田氏の愛情が入った思いの伝わる素敵なイラストでした。そのイラストを一枚一枚見ることによって父が元気になるっていく様な気がしました。

5年の間寝たきりの生活をしました。が、筆談ではありましたが、その筆から読み取れる論理的思考は意欲、情熱

を感じさせ、頭脳は明晰であり非常にしつかりとしていました。

前にも書いた事がありますが、NHKで放送された手塚治虫先生の「ファミリーヒストリー」に出演させて頂いた時もアナウンサーの方とアトムの話を筆談させて頂いた事を思い出します。亡くなる一週間前までアトムの絵を見ながらベッドの上で松稲会PT(リハビリ指導員)が教える運動を文句も言わず一生懸命取り組んでいました。

父の生き様を支えたのがアトムの絵であり、力を与えてくれたのがアトムでした。手塚先生が父を見守ってくださっていたのかも知れないと思えました。

Profile

1950年12月8日大阪に生まれる。
1972年、追手門学院大学卒業後、米国ボストンカレッジに留学。
1975年に帰国後、アップリカ葛西に入社。営業部、副社長、社長を経て、1996年に社会福祉法人松稲会理事長に就任。松稲会は社会福祉法人として高齢者介護施設「アップリケア」と認可保育園マザーシップ保育園を運営している。
アップリカ葛西副社長時代に国連UNEP環境計画のスペシャルアドバイザーとして子供たちのために地球環境問題を考えるプロジェクトに参画し、世界の賛同者と世界会議、イベント普及活動などを行いながらその人脈などを広げ現在に至る。



2011年11月発売 講談社 全一巻
『どついたれ』手塚治虫文庫全集

た。本当に信頼し合っ

